ボッチャから学んだ大切なこと

山形県立天童高等学校　二年　笹原　捺葉

「共生社会」という言葉を初めて聞いた時、私は難しそうで、自分とはあまり関係のないものだと感じていた。普段、障がいのある人と接する機会があまりないため、自分にできることはないし、国や行政が取り組むものだと思い込んでいた。

しかし、ボッチャというパラスポーツを体験する機会があり、そこで私の今までの考え方が変わるきっかけになった。テレビなどでボッチャという名前は聞いたことはあったが、実際にプレイするのは初めての経験だった。ルールを聞いた時に「簡単なスポーツなんだろう」と思っていた。ところが実際にボールを投げてみると、とても難しく、思うように狙った場所へ投げることができなかった。運動の得意、不得意や障がいの有無などは全然関係なく、どこを狙って投げるかみんなで作戦を考えながら行う楽しいスポーツだと感じた。狙い通りに決まった時はみんなで一緒に喜び合い、とても盛り上がった。

この体験を通して私は、ボッチャは障がいの有無に関係なく、誰もが一緒に楽しみ、笑顔になれることに気づいた。今までの私は、ショッピングモールや駅で障がいのある人とすれ違った時にどう接すればいいか分からず、無意識に避けてしまっていた。だがボッチャの体験から道具やルールの工夫さえあれば、特別な知識がなくても一緒に笑い合えるし、対等に楽しめることが分かった。障がいがあるからといって勝手に壁を作り、怖がる必要なんて全くないんだと実感した。これからは関わることを恐れず、私たちと同じひとりの人間であることを忘れずに過ごしていきたい。そして困っている様子を見かけたら「何かお手伝いしましょうか」と声をかけ、お互いに歩み寄ろうとする気持ちを持つことが大切だと思った。

「共生社会」は自分とは関係ない世界だと思っていたが、ボッチャの経験を通して私たちの日々の生活のすぐ隣にあるものだと気づいた。まずは私たち一人ひとりが街で障がい者を見かけた時に少しだけ視野を広げ、お互いを思いやる心を持つことが必要だと思う。こう

した意識や思いやりの気持ちは、大人になってからではなく、私たち高校生が学校生活でも大切にしていかなければいけないと思う。学校生活を振り返ると、それぞれ得意なこともあれば苦手なこともある。例えば、みんなの前で堂々とした意見を言うのが得意な人もいれば、地道にコツコツと準備をして静かに周りを支えることが得意な人もいる。私は、自分とは少し違うからといって勝手に距離をとってしまうことがあったかもしれない。しかし、これからは「その人らしさ」として理解することが大切だと思った。

ボッチャの体験で私は障がいのある人に対する考え方が大きく変わった。「自分には関係ない」と目をそらすのではなく、私と同じひとりの人として向き合っていきたい。また、相手の気持ちを知ろうとすることやお互いを大切にしようとする気持ちを持つことが、共に生きていくために大切なことだと感じた。

「共生社会」と聞くと少し難しいことのように感じるけれど、身近な人を思いやったり一人ひとりの違いを認めることから始まるのだと思う。これからもこの体験で学んだことを大切にし、相手の気持ちを考えながら、誰もが安心して過ごせる環境を少しずつつくっていきたいと思う。